一般社団法人　日本脊椎脊髄病学会

平成 29 年度　第 1 回プロジェクト委員会

議事録

日　時　：　平成 29 年 4 月 14 日（金）　午前 6 時 30 分～8 時 00 分
場　所　：　ロイトン札幌 2F　クリスタルC
（第 46 回日本脊椎脊髄病学会会場）

出席者：山下　敏彦（担当理事）、川上 守（委員長）、波呂 浩孝、今釜 史郎、山崎 正志、村上 英樹、海渡 貴司、西田 康太郎、宮腰 尚久、松山 幸弘、山田 宏、井上 玄（以上委員）、田口 敏彦（アドバイザー）、持田 譲治（アドバイザー）
以上 14 名
欠席者：新谷 歩（アドバイザー）
以上 1 名

1．報告事項

海渡委員より　プロジェクト「慢性腰痛症に対する薬物療法の臨床経済研究」の本学会における発表内容に関して説明があった。解析患者数 546 名。投薬介入から第 3 期から 4 期で最大の改善効果が得られる傾向があった。満足度に関しては、「満足」・「非常に満足」が合わせて 50%、「不満」・「非常に不満」14%で概ね良好な結果であった。費用対効用は 273 万円/QALY であり WTP（支払い許容額）を下回っていた。JOA スコア、RDQ の変化は薬剤間で大きな差は認めなかった。

- 海渡委員の報告に関する各委員の意見

田口アドバイザー:BPEQ のドメインで結果の差がある理由は→海渡委員　今回の発表では結果の解釈は行わず、公表のみに留める予定であり、今後改めて考察したい。

持田アドバイザー:薬剤によって効果に差があったことを、名称を伏せてでも公表すべきではないか→審議の結果、本学会の発表で、各薬剤の名称を伏せて、結果を公表することとなる。

山下委員:今後、どのようなサブ解析を行う予定か→海渡委員　新谷委員と相談して進める予定であるが現在のところ下記を予定

全体の薬物治療効果
予後因子
脱落症例の解析（time to discontinuation）
薬物変更パターンの最適化
など

2.議題

新規プロジェクト研究「頚椎由来の頚肩腕症状に対する薬物療法の臨床経済研究」に関して、議論を行った。財源は前研究と同額が学会より支給される予定であることが確認された。各委員より以下の意見が出された。

- プレガバリンを加えるべきではないか。
- トラマールあるいはワントラムを加えるべきか。
- 薬剤の種類が多いと解析が困難となる可能性がある。
- 正しく診断し、正しく処方をおこなえば症状は改善する、というメッセージが出せる研究内容が望ましい。
- 神経根症は自然軽快することも多いため、逆に改善の悪いものを要因分析し、どういった治療が良いかを検討すると良いのではないか。
- 症状で患者をリクルートし、診断はあとで行っても良いと考える。
- 前プロジェクトを参照して、欠損データの多い項目を省いてはどうか。
- 神経根症のみでなく、頚部痛のみも含めるべきではないか。
- 術後の遺残痛を含めるべきである。
- 肩疾患のルールアウトをどう行うかが課題である。

上記意見を踏まえ、以下を決定した。

・本委員会後、前プロジェクトを参考に研究プロトコールのたたき台を作成する。
・薬剤は前プロジェクトで解析した4剤＋プレガバリンの計5剤で行う。
・各製薬会社に学会全体のサポートという形で理事長名で研究資金のサポートを募る。

3.次回開催日時　第50回日本整形外科学会骨軟部腫瘍学会の会期中の2017年7月13日に予定

以上

文責：井上　玄